

不在の柿

『新壘』  
65-1号

地球儀の埃を拭ふしたたかさ世界を撫づる念ひにや  
あらむ

萩も散り人とも訣れ秋深むいよよ詫びしき華やぎに  
入りぬ

不在告ぐるメモに載せおきし柿ひとつ窓陽にてらてら  
熟れつつあらむ

花つけぬ薔薇は青き景いつまでも冥きあはひに夕光を  
抱く

五十余年見つけて焦る夢持てり化学テストの白紙答  
案

冬薔薇

『新壑』2  
65-2号

雪ぐもる昼のトラックよりおろされし鉢植ゑの薔薇の  
茫然自失

沈黙は流れるやうな刻きざむ焦げ茶の帽子に立つう  
しろ背よ

つひにしてひらかぬままの沈黙に入は去りゆきやがて  
忘るる

寒風を如何に諾はむげに弧り背後に立てるまぼろし  
もなし

来世とふ界に持ちゆく過去あまたこの世のガラスに透  
かしてゐたり

冬苺 『新壑』65-3号

冷水に洗ふ苺のしたたりは冬の余情と紅に飾らむ

紅の冬華の際やかに目を奪ふ雪のほか彩りのなき窓ぎ  
はの卓に

ゆるやかなる言葉に和む冬ま中人待つ十字路の雪の  
燦々

居坐れる冬と思ふに陽が射せばかすか意志のやうなも  
のの匂へり

逝くことのいづれあとなき知らざりて詭へ直す冬の喪の  
服

孤の冬

『新壑』4  
65-4号

蹠の冷めた冬のわが廊下おろかにも生きることの自  
己主張

ゆるやかな言葉に和む冬ま中ひと待つ十字路の雪  
燦々

貼り替ふる壁のクロスのしらしらと待つとふ像の影置く  
さみし

個々の孤独たわわ実らせ耀やかす雪をふまへて如月の  
樹々

冬の灯を消して真闇に見えくるは怖るるならず瓶の  
白百合

やはらかき空気漂ふきさらぎの園に目覚めてわが意  
志ふとる

弔ひごとつづくきさらぎ泪ほどのものも混じりてつらら  
透明

世の罪科ぎりぎりまでは赦されむ天を仰ぎまたひと  
つごと希ふ

補聴器とふもうひとつの耳もつ友と二月尽喧燥の街に  
出遇ひぬ

喪ふより得たる虚しさ識り尽くす道に惑ひてみちに  
戻りぬ

連翹

『新壑』65-6号

黄の色に咲くほかはなき連翹の切なき春よ人を喪ふ

春といふやさしき闇に蚊の氣配かばかりなれどこころ  
刺さるる

独りに足らふ斯かる生活にふぶくなり桜花と言へど夕  
べ身の冷ゆ

愛と言へど自己愛以外に何あらむわが耳鳴りを樂のこ  
と聴く

死のちは晴れゆく空か降りつづく雨に濡れつつ身の平  
衡はあり

五月の著莪

『新壑』  
65-7号

逢ふといふあてなくて人を待つ夕べさくら大樹はわれ  
を隠して

遅咲きの著莪を残して別れ行くこの哀切も五月の僥  
倖

山苳の花白く明るく散るゆゑに朝の電話の気掛りは  
消ゆ

鏝ひろき帽子に溜る山苳の花その重たさは敗者の位  
置づけ

用ぢ忘れし身の綻びのあからさまをりをりを針さし  
ませ繕ふ

櫛型南瓜

『新壑』  
65-8号

晚餐と言ひ替へて灯すテーブルに盛られてゐたる櫛型  
南瓜

桜花散りてあとかたもなき坂をゆく胸底に湧くは故  
なき怖れ

吹き荒れて花みな殺しの五月風鎮めがたきは胸内に  
たたむ

芍薬の固き蒼に押し当てて耳より聴かむ永劫未来

人不在なを書き置かむみづみづと紫陽花は甕に溢れ  
てゐたり

雨の紫陽花

『新壑』9  
65-9号

あぢさるは押し黙りつつ雨に濡れ崩さざる球形の尤も  
なる意志

降るもよし照るもよろしと蒼白の球よせ合ひて紫陽  
花盛る

蒼白にうち顛へながらわが詠むは使徒にもとほき詐り  
の詩

晩く来て速やかに去る夏ゆゑに暑中御見舞出しかね  
をり候

掌を合はす日々の営みさきがけて逝きたる人より自  
らのため

夏の闇

『新壑』  
65-11号

カレンダーは既にして九月色づかぬままなるトマトの硬  
き沈黙

神在りていまだにわれを見捨てざり朝々を保つ平均  
体重

身の恥を重く抱へて入りゆく闇に蹟くは闇よりほか  
なく

強がりを含むくれるし闇ありて伸ばす手に掴む虚空  
のむなしさ

くらぐらと言葉は嘘をつくものと秋くれば稔る黒葡萄  
たわわ

倅せの尺度

『新壘』  
65-12号

ぎりぎりまでの妥協にあらむ時間を巻き返さばわれ  
にはもとより何もなく

しばらくは言葉を絶ちて籠りるむ自虐と言ふも身の  
過ちぞ

倅せの尺度は徒歩にて測りゆくふり向かざれば浄き  
歳月

不幸せなど忘れたやうな足どりで特売のパンを買いひに  
出でゆく

生きてゐるこの価値のなきさみしさよ人間よりも言  
葉が欲しく